宇都宮大学附属農場で牛と触れ合うお茶の水女子大の学生。本来牛は臆病な動物で知らない人には近づかないが、普段から学生にかわいがられているので、人なつっこくすり寄ってくる

研究領域広く、就職先も多種多様

農学部人気で女子が殺到

重労働だし、地味そうだし……。そんな3Kのイメージは昔の話。食、生命、環境、バイオ、エネルギーとトレンドもしっかりキャッチ。農学部に注目が集まっている。

フリーライター　椅崎明子　写真　村上宗一郎

目の前に置かれた鶏卵大の牛の卵巣。及び腰だった学生たちも、宇都宮大学（栃木県宇都宮市）博士研究員のサラントラガさんの指導で手に取り、注射器で卵子を採取し始めた。

「好奇心旺盛な学生さんが多く、最初はこわごわですが、やがて手に取ってチャレンジするようになっています」（農学部・長尾慶和教授）

同大農学部はそのユニークな取り組みで、全国でも知られる。附属農場（栃木県真岡市）が全国に先駆けて文部科学省の「教育関係共同利用拠点」に認定され、2010年から他大学の学生にフィールド実習を行っているのだ。同農場は東京ディズニーランド二つ分の広さに放牧草地、水田、果樹園、野菜畑などが整備されており、首都圏から約1時間半という地の利の良さで、日本女子大学や女子栄養大学など7大学の学生を受け入れ、実習、講義を行ってきた。

「農学系の学びはボーダーレス化し、食をはじめ、生命科学、環境、医学領域へと広がっています。従来の農学分野に加え、新しい領域も私たちの生活と密着しており注目度が高い。恵まれた修学施設とオリジナルなフィールド実習を、他大の学生にも提供していきたい」（長尾教授）

人間の心を潤す学問

9月末には栃木の水女子大学（東京都文京区）大学院SHOKUIKUプログラムの学生が、1泊2日の日程で「食と命のフィールド実習」を行った。プログラムにはフィールドでの牛の飼養管理実習や搾乳、水稲収穫、脱穀などの調製実習、研究室での牛の生殖科学実験が盛り込まれている。実験では、卵巣からの卵子の採取、卵子に針で精子を注入する顕微授精、受精後の卵子の観察などを行った。

大学院1年生の野村朋子さんは心理学を専攻しているが、興味のある食について知りたくて参加したという。

「ここまで専門的な実験をできるとは思わなかった。こんな近くで牛と触れ合ったのも初めてでドキドキします」

他専攻の学生の心までとらえる農学の魅力とは一体何なのだろうか。宇都宮大の杉田昭栄農学部長は言う。

「植物や動物への関心から農学系を目指す学生は、以前から一定数いましたが、特に東日本大震災以降は人間の心を潤す学問として見直されているような気がします。農学は学問へのアプローチに気持ちがかぶさる、ハートフルな分野だと思う」